

被災地での宿泊研修 – 石巻グループ

石巻市周辺被災地状況視察、宮城県志津川高等学校の生徒とのグループワーク

一日目は二つのグループに分かれて行動しました。その一つ「石巻グループ」は、石巻市において旧門脇小学校の訪問、避難場所となった日和山公園、鹿島御児神社への避難経路の確認と日和山からの視察、旧大川小学校の視察を行った後、南三陸町において、宮城県志津川高等学校の生徒とのグループワークを実施しました。

旧門脇小学校→日和山公園→鹿島御児神社

旧門脇小学校では、事前研修でも講師を務めていただいた鈴木 洋子先生に案内していただきました。

まず、平成 29 年 5 月に震災遺構として保存されることになった校舎を視察しました。鈴木先生から、「解体を望む地元の方の声もありましたが、校舎中央部分を残し、保存していくことになりました。現在は校舎全体にシートが掛けられ、立入りが禁じられていて中の様子を見ることはできませんが、将来、防災・交流施設で当時の様子を映像や写真等で見るようになる予定です。」といったお話を、実際に校舎を見ながら伺いました。

次に、震災が起きた時、同校児童や近隣住民たちが避難のために駆け上がった校舎裏手の日和山・鹿島御児神社までの避難経路を、参加者も実際に走りました。参加者は、当時の小学生たちが、その長い坂道をどんな気持ちで避難したかなどについて、深く思いを巡らせました。



また、鹿島御児神社からは、公益社団法人みらいサポート石巻のスタッフ・藤間 千尋さんたちの案内で「石巻津波伝承ARアプリ※」を活用した「防災まちあるき」を行いました。日和山公園内を歩きながら、眼下に見える現在の石巻市街と、タブレットに映し出された震災直後の津波痕跡が残る町の画像、そして石巻の未来図を比較しながら見ることで、当時の被災状況や現在の復興状況を体感することができました。また、復旧事業の進捗とともに被災の爪痕が見た目には分かりにくくなる中でも、震災遺構やARなど様々な方法で震災の記憶を残し、自分たちと同じ思いをする人を少なくしていこうという被災地の方々の思いに気が付きました。

※ 津波による町の被害状況や石巻の「過去－現在－未来」を伝えるために、AR（Augmented Reality）技術を用いて開発されたスマートフォン／タブレット端末向けアプリ



旧大川小学校（石巻グループ、女川グループ共通）

平成23年3月11日、15時37分に津波が到達し、児童・教員84名が死亡・行方不明となった旧大川小学校を訪問し、班のリーダーが慰霊碑に献花、全員で黙とうを捧げました。黙とうの後、参加者たちは事前研修の内容を振り返りながら、津波によって破壊された校舎、子供たちが実際に避難した経路、遺族の方々により避難先の候補に挙げられた裏山等を、自ら歩き見ることで、大川小学校での痛ましい事故と向き合い、自分たちの答えを探していました。



旧大川小学校に関する数字

（佐藤敏郎先生提供資料より抜粋・引用）

- 108名** 当時の全校児童数。校庭にいたのは 77、8 名
- 74名** 犠牲になった児童数。死亡 70 名、行方不明者 4 名
- 10名** 教職員の犠牲者数（校庭にいた 11 名中）
- 51分** 14:46 地震発生から、15:37 津波到着までの時間
- 8.6m** 大川小を襲った津波の高さ
（2 階教室の天井まで達した跡が残る）
- 1分** 避難した時間



宮城県志津川高等学校の生徒とのグループワーク

南三陸町地域連携型中高一貫教育を行う、宮城県志津川高等学校（以下「志津川高校」という。）の山内 松吾校長の挨拶に続き、生徒会執行部により、同校における防災教育を主なテーマに、志津川高校の紹介をしていただきました。その中で、東日本大震災の際に、当時の生徒が、自力での避難が難しい方々を学校がある高台まで救助したこと、志津川高校が高台に位置するため、学校が近隣の方の避難所としての役割を果たしたことなどを説明いただきました。



学校紹介の後、参加生徒は 志津川高校の生徒と6名ずつの混合チームを編成し、班ごとに4コマ漫画教材※を使ったグループワークに取り組みました。これは、避難所運営における困った状況を表現した4コマ漫画の、空欄になっている4コマ目のセリフを、グループ協議を通して考えるというもの（困った状況例：「避難者の人数に対し不足する支援物資の配布」、「避難所における個人情報が入った名簿の掲示」等）で、参加者は志津川高校の生徒の体験談などを参考に、自分たちの答えを考え、グループ協議を通して浮かんできた「高校生としてできること」などについて発表を行いました。

「震災から1か月後に運動会を開催するべきか」という4コマ漫画のチームでは、志津川高校の生徒から、「私たちが運動会を開催できたのは震災から4～5か月後だった。それを踏まえると、1か月後の開催では、震災で家族や友人を亡くした子供たちは楽しんで参加できないだろうし、周囲も楽しめないだろう。」という意見がありました。これに対し、「子供たちの元気な声が、仮設住宅に入居する高齢者などの元気につながるのではないか。」という意見もあり、参加生徒は、様々な立場の人たちの気持ちを考えて判断をしていかなければならないことを、グループワークを通して理解しました。

※ 宮城県南三陸町のとある中学校の避難所運営訓練をもとに、慶應義塾大学防災社会デザイン研究室が作成した演習型の防災教育教材

グループワーク後、志津川高校の生徒から、避難所となった学校の様子を残した写真、震災時の様子を伝える品々、震災から現在までの取組をまとめた資料、全国各地から寄せられた励ましの手紙や寄贈品等を展示する「震災資料室」を紹介していただき、震災の風化を防ぎ、次の世代へつないでいこうという学校の思いを受け止めました。



被災地での宿泊研修 石巻グループの参加者感想

●旧門脇小学校訪問

門脇小学校の子供たちが避難したルートを体験して、東北と東京では条件が異なるが、今行われている避難訓練・防災訓練のやり方は変えるべきではないかと思った。そしてそれは僕たちの世代が考えて、変えていかねばならないと思った。	生徒
避難ルートを実際に走った。距離が長くて、上り坂で疲れた。小学生たちが3月という寒い時期に、このルート走って必死に津波から逃げたことを考えると、とても大変なことだったのだと感じた。	生徒
避難時は、普段から落ち着いて歩くという指導をしていたが、教えていることが必ずしも正しいことではなく、間違っている可能性があること、また、震災は備えあれば憂いなしともいうが、それにより過信して避難が遅れることもあることに気付かされた。逃げるという行為だけでも一歩間違えば助からない命があったと考え、その地域ごとに適した避難方法を考えていかなければならないと感じた。	教員

●日和山防災まちあるき

AR アプリを使って、実際に自分の目で見たことで、心のどこかでこれまで、東日本大震災を少し他人事のように考えていた自分がいたんだなあと反省した。やはり日頃の訓練が大事だと改めて思った。	生徒
----------------------------------------------------------------------------------------------	----

●志津川高等学校交流活動

志津川高校では、災害時や災害後に予想される問題にどう対応するかを話し合った。私たちのグループでは仮設住宅から移転する方々への対応について考えたが、このテーマを提示されるまで、災害時・災害後の地域コミュニティについて考えなければならぬことに気付かなかった。その場その場で臨機応変に行動することも大切だが、緊急時が来る前にもっと対策を考えることも、また同じくらい大切だと感じた。	生徒
校内の「震災資料室」で、高校生が作った震災について書かれた新聞が置かれていた。もしも自分なら、震災が起きた後、とても新聞作りなどの行動は起こせないと、行動を起こした人のすごさを感じた。	生徒
志津川高校の当時の高校生の皆さんは、避難所になった学校の中で、一人一人がそれぞれの役割を見付けてボランティア活動をしていたと知り、共助ができていたということがすごいと思った。私の学校ではできるだけだろうか？と考えた時、防災士の資格を取得したら、私が中心になって周りをまとめていけるようになると思った。	生徒
志津川高校では、当時の高校生が行ったことをきちんと伝えている。現在の高校生は当時小学生であったが、高校生となった今、自分だったら何ができるのかを考えることで、より高度な自助共助が養われると考える。	教員

石巻・女川グループの参加者感想

●旧大川小学校視察

旧大川小学校の皆さんは、山に逃げることができなかったのでなく、しなかったのだと聞いて、ハザードマップや避難訓練等の想定にとらわれすぎではいけないこと、自分で考えて避難しなければならないことを学んだ。その後の防災士養成講座でも繰り返し学んだことなので、今後に生かしていきたい。	生徒
旧大川小学校で驚いたのは、想像よりも津波の到達地点が高かったこと。校舎のはるか上に到達地点の看板があり、とても驚いた。また、思った以上に校舎のダメージが強く、津波の威力の恐ろしさを感じた。	生徒
視察の時間は短かったが、写真で見るとより衝撃的な光景だった。震災遺構としてそれが残されていることで、次の世代にも伝わり、県外の人にも伝わり、人々の意識にいつまでも残っていくと思った。	生徒
津波で壊された建物から教室が見え、子供たちがここで学んでいた跡が見えて、胸が苦しくなった。事前研修で佐藤先生が話していた「ここを残すのに5年かかった」という理由が理解できた。それでも残すと決断されたからには、私たちがここで何を感じ、学ぶのか、よく考えなくてはならないと思った。	生徒
事前研修において佐藤先生の講話を聞き、実際に校舎を視察。校舎を見学する直前に、児童が避難していた道路を見て衝撃を受けた。小学校の裏山に、津波の高さを表示するラインが、マークされていた。距離や時間を考えると、十分に避難できる場所であることを認識した。当時の判断が悔やまれる。	教員

被災地での宿泊研修 – 女川グループ

女川町周辺被災地状況視察、宮城教育大学の学生等とのグループワーク

もう一方の「女川グループ」は女川町において、女川町まちなか交流館や女川町地域医療センターの「津波記憶石」等の視察、コラボスクール「女川向学館」の方々との交流を行いました。女川町を出発した後、旧大川小学校を經由して南三陸町に到着し、宮城教育大学の学生及び卒業生とのグループワークを実施しました。

女川町まちなか交流館→女川町地域医療センター

まずは、女川町観光協会の阿部 真紀子さんたちと女川町まちなか交流館の前で合流し、震災遺構となった旧女川交番などを案内していただきながら、津波の際に避難した経路をたどって海沿いから高台にある女川町地域医療センターまで歩きました。地域医療センターの敷地には、事前研修で佐藤敏郎先生から話があった「いのちの石碑」につながる「津波記憶石」があり、ここでは、高台のこの場所においても、石碑の高さである 2.7 m の高さまで津波が押し寄せたこと、その津波が山にぶつかり町の方に戻ったことで被害が拡大し、石碑に刻まれているとおり827 名もの方々が犠牲になったことなどを伺いました。

その後、まちなか交流館に戻り、映像等で津波の被害状況や若い方々の意見を積極的に取り入れて進めている女川町の復興計画について説明していただきました。



女川フューチャーセンター Camass

女川フューチャーセンター Camass では、「コラボスクール^{※1}」である女川向学館を運営する NPO 法人カタリバのディレクターで拠点長の渡邊 洸さんより、コラボスクール、そしてマイプロジェクト^{※2}について説明していただきました。その後、渡邊さんの紹介で、女川向学館で学び、マイプロジェクトに取り組む鈴木 仁さんと、「いのちの石碑」など「1000 年後のいのちを守るプロジェクト」に取り組む鈴木 元哉さんから、それぞれの活動と震災により変化した生活環境などについてお話を伺いました。

鈴木 仁さんのマイプロジェクトは、「ホヤの魅力を全国に」というものです。女川町の特産品であるホヤの輸出が制限され危機的状況となっていることに対し、国内でのホヤの消費を少しでも増やそうと、高校生でありながらホヤを使った新メニュー(ホヤボール)の開発や販売、情報発信など、その魅力を全国に発信するプロジェクトに取り組んでいるということでした。参加生徒は、同世代の高校生が取り組んでいることから、ホヤ愛にあふれる熱いプレゼンテーションに聞き入り、災害からの復興に高校生でも積極的に関われることに気付くほか、ホヤを食べてみたいといった感想も上がりました。

また、仮設住宅では姉弟が一つの部屋にならざるを得ず勉強や生活面で不具合があった話や、震災直後、友達と遊ぶことができず、それが苦痛であったという話など、生徒に近い世代の生の声を聞くことができました。

※1 仮設住宅などで暮らし、落ち着いて勉強する場所を失った被災地の子供たちのために、避難所として使われていた小学校を借り、主に小中学生に学習指導と心のケアを実施する放課後学校

※2 生徒一人一人が町の課題を解決するため、自らのプロジェクトを立ち上げ実行することを通じて、「前へ踏み出す力」や「考え抜く力」「チームワーク力」を学ぶ NPO 法人カタリバによるプロジェクト学習。地域の課題を解決するとともに、復興を担う未来のリーダーを育てることを目指す



宮城教育大学の学生及び卒業生とのグループワーク

女川町周辺被災地の視察を終えた後、南三陸ホテル観洋にて、国立大学法人 宮城教育大学 防災教育未来づくり総合研究センター 教育支援コーディネーターの千田 康典先生にコーディネーターとなっていただき、震災当時に高校生であった、被災体験や被災地でのボランティア経験のある同大学の学生及び卒業生とのグループワークを行いました。

自己紹介の後、まずは女川町の視察を振り返り、「自分が女川町にいる時に地震が発生したら、安全に避難するために注意しなければならないこと」を付箋に書き出し、グループ内で発表しました。続いて、4コマ漫画教材(24ページ参照)を使ったワークショップを行いました。

参加者は、正解のない課題に対しグループ内で出されたいろいろな意見を、宮城教育大学の方々によるアドバイスをいただきながら、グループ内で一つの意見にまとめ、発表を行いました。

一例として、まだ避難所に来ていない家族分のスペースを子供が確保し、そのことに対し周囲の大人が文句を言っているといった4コマ漫画では、最後のコマで避難所を運営する方がいうセリフに、「現時点でここにいる方の分だけスペースを詰めて確保してください。もし後になって家族や親せきの方が来た場合には、空いているスペースと一緒に移動をしていただきます。親がまだ来ていない子供たちは、こちらのスペースに集まり、家族をみんなで待ちましょう。」と発表しました。

ワークショップを一緒に行った宮城教育大学3年生の吉川 奈穂さんは、「参加生徒たちが、多様な被災者を尊重し、みんなを安心させようとする視点を持っていたことに驚きました。」と感想を語っていました。



被災地での宿泊研修 女川グループの参加者感想

●女川町まちなか交流館等視察

<p>甚大な被害を知り、津波に対する考えを改めた。特に「いのちの石碑」につながる「津波記憶石」を見て、想像をはるかに超える高さの津波が女川を襲ったことを知り、とても恐怖を感じた。また、ホヤを広めようとしている鈴木さんのプレゼンテーションを聞き、3.11 がありながらも自分が思うことに向かって一生懸命に活動している姿に、とても勇気をもらった。</p>	生徒
<p>もっと建物が建っていると思っていたが、まだ土の山（盛り土）のままの場所がたくさんあった。もっと日本中が助け合って復興させていけば、復興までの期間は早まるのにと考えた。</p>	生徒
<p>後日、調べたのだが、大津波記念碑というのは各地にあり、大津波への教訓を静かに伝えているように感じた。こうして石碑を設立することで、震災の記憶を風化させず多くの人たちに広めていこうと、被災者の方々自身が協力し合い、頑張っているのだと思った。今後、災害が起きてても、被災する人が少しでも減るような社会になっていくことを願う。</p>	生徒
<p>女川町まちなか交流館にて、当時の被害状況を震災前と後のスライドショーで見た時、驚くほど変わっていることが分かった。建物の大部分が津波で流されていたことから、甚大な被害であることが分かる。また、動画で当時の映像を見たが、改めて津波の怖さを学んだ。重量のある物でさえ簡単に流されており、人間は自然に対してあまりにも無力だということを考えられる映像だった。</p>	教員

●女川向学館交流活動

<p>NPO 法人カタリバが行っているコラボスクール・女川向学館での体験が印象深かった。震災後、勉強をしたくてもできない環境の子供たちに、勉強できる環境を与え、放課後の居場所を提供する等の活動は、思いついてもなかなか実行に移すことはできないことだと思う。コラボスクール出身の高校生の話から、地元を復興したいという熱意が伝わってきて、このような熱意を持てることが素晴らしいと思った。</p>	生徒
<p>女川フューチャーセンター Camass で、女川町でそれぞれ小学生・中学生の時に被災した高校生と大学生の方の話聞いた。「遊びたくても道がないから友達と会えない」、「会えたとしても、がれきが重なっていて危険で遊ぶ場所がない」など、水道・電気・ガスが長く使えなかったというのは知っていたが、遊ぶこともできなかったということを初めて知った。そして学生になった今、町を活性化、発展させるために頑張っていることも知った。（折れて倒れた電柱がそのままになっていたことに驚いた。津波の力の強さを知った。）</p>	生徒
<p>女川町周辺では高台への建設が進められており、震災における教訓を町全体で共有して取り組み、その教訓を風化させない意思と努力を継続していく粘り強い姿勢を学んだ。震災当時、小・中学生だった自身の体験、そして現在に至るまでの話を聞き、苦労したことよりも「これから先へ」、「前を向いて行く」という希望や夢を持ち、女川町という町で「海と共生していく」という強い気持ちを感じることができた。</p>	教員

●宮城教育大学交流活動

<p>私たちと同じ年くらいの時に震災に遭った大学生との交流だった。震災の時にどう行動するのかを話し合ったが、最初は「どう行動するか」しか出てこなかった。しかし私の班の担当だった大学生が、「心構えはどう思う？」と聞いてくれたところ、行動だけだった意見に、「どういう心持ちで行動するか」が加わり、より議論が深まった気がする。</p>	生徒
<p>被災者の方々の気持ちになって考えることが特に難しかった。理由は、私たちはまだ「未災者」だから。しかし、私たちはこれから考えなくてはならない。私たちが被災者になってしまった時のことを、そして被災者になった後のことを。このことは簡単に考えてはいけなもので、とても重要なことだと学んだ。</p>	生徒
<p>4 コマ漫画にセリフを入れた。普通に学ぶよりもいろんな意見を取り入れることで、避難の仕方や防災に関する知識が様々な角度から学ぶことができて良かった。私も来年大学生になるに当たり、参加している宮城教育大学の学生さんたちのように、幅広く多面的な考えで、後輩や、防災についてあまり知らない人にアドバイスできるようにになりたいと強く感じた。</p>	生徒
<p>教育支援コーディネーターの千田先生から被災地の話を伺った。特に印象的だったのは、被災して物に困っていた時に知り合いの方から物資の支援があり、とても助かったとのこと。多くの道路が被災したにもかかわらず奇跡的に壊れていない道路があり、物資が届いたとのこと。私も今後、被災地域に物資の支援をしていきたい。</p>	教員
<p>千田先生は、元中学校校長で保健体育担当の教員だったということで、防災に関して長年経験を積み上げられている中での講話であった。 特に、へき地小学校での取組は校庭の放射能汚染に関する内容で、土壌汚染に対して地域住民と連携し、汚染した土壌を取り除いた取組を伺った。特に地域住民との連携は欠かせないものであり、それは防災活動において、どのような地域においても肝になる部分である。今後も 地域との連携を密にして、防災教育を推進していきたい。</p>	教員